

## 地域文化と造形教育 —稲藁を素材としたもの作りの授業—

# Regional Culture and Art Education: Craft Class Using Rice Straw

野崎 克行\*・富田 晃\*\*  
Katsuyuki NOZAKI\*・Akira TOMITA\*\*

### 要 旨

現在では、いわゆる「100円ショップ」に見られるように、生活用品や装飾品ほか、さまざまなものが非常に安価に手に入るようになった。そのため、もの作りという行為は、生活から切り離されて、一部の爱好者のものになってしまったようである。津軽平野では昔から稲作が行われ、先人達は米と一緒に藁も収穫物と考え、身の回りの生活用品や作業に使う道具などを当たり前に藁で作ってきた。今回、大学生にこの藁に着目してもらい、藁細工の実体験を通して、もの作りの楽しさ、先人達の知恵と技、藁という素材の性質などについて学ぶ授業を実施した。学生達は馴染みのない藁と格闘し、いろいろな作品を作り楽しんでいた。また、学生の感想レポートを通して、藁の文化を考えたり、現在の生活様式を省みたり、いろいろな事を感じてもらえたことが確認できた。

キーワード：稲藁、藁細工、伝統技術、もの作り

### 1. はじめに

「地域」という用語が、取りだたされるようになって久しい。「地域」とは、本来、区切られたある範囲の土地といった意味であるが、近年では、「地域活性」や「地域医療」などというように、大都市圏から離れた場所を政策上の対象とするときに使用されることが多いようである。

弘前大学の教養教育では、カリキュラム改編にともない2016年度から全学の2年生（一部1年生）を対象にした必修科目「学部越境型地域志向科目」が開講されている。この科目は大学における積極的な学びの姿勢を習得するための「基礎ゼミナール」（1年前期）と地域をテーマにした課題解決型の「地域学ゼミナール」（1年後期）をすでに履修した学生を対象とし、その内容は「地域課題は高度化・複雑化しており、異業種間のチームワークが必要です。学部横断型のクラス編成（文理の学生が履修）で、青森に関する内容についての専門知識を活用して学んでいく、学生参加型学修です。」と履修案内で示されている。つまり、「基礎ゼミナール」で、まずは大学における学修になじみ、「地域学ゼミナール」で地域の問題を知り、「学部

越境型地域志向科目」において、いよいよ地域と実践的にかかわろうというのである。大枠において、上記の目的をもつ必修科目「学部越境型地域志向科目」の選択肢の一つとして「地域プロジェクト演習：地域産品の創造」という科目を立ち上げた。内容は、前半が藁細工であり、後半が手織りものである。実技を伴う授業であり、場所、道具、指導の関係から定員を20名とした。開講初年の初回授業において定員の10倍を超える受講希望学生が殺到し、混乱するとともに、本授業の参加希望学生の多さに驚いた。2年目からは、事務による事前抽選としたので混乱はないが、受講希望学生は相当多いものと思われる。以下、本稿は、この授業における、前半7回の「藁細工」を、紹介とともに、本授業の成果を確認するものである。

### 2. 青森の藁文化と現状

筆者（野崎）が居住する青森県つがる市稻垣町は、津軽平野の中央に位置し、その名が示すとおり水田に囲まれた稲作地帯である。稲づくりは4月の苗作りに始まり、5月の田植え、そして日々の水の管理と草取りを経て、9月の稲刈り、10月の脱穀へと続く。ビ

\* 稲垣藁の会  
\*\*弘前大学教育学部美術教育講座

ニールなどの安価な化学製品が普及する以前は、脱穀時にとれる藁は、米とともに大切な产品であった。筆者は、雪が積もる季節に、家の中でいつも、次の年の農作業で使う繩やツナギ（稻などを束ねる簡素な繩）などを藁にまみれて作っていた父を思い出す。幼少の筆者が楽しみだったのはシビ布団（藁のマットレス）の入れ替えだった。一年使ったシビ布団はペちゃんこになるので、秋の収穫でできた新しい藁からシビ（稻の柔らかい外側の葉っぱ）を集めて、古いシビと入れ替える作業である。ふっくら膨らんだシビ布団に寝ると新しい藁の香ばしい匂いがして至福の瞬間であった。つまり、稻の収穫とは、米だけでなく藁も一緒に収穫する作業だったのである。米の収穫時に大量に入手された藁は、農作業の道具や生活用品として活用されるとともに、残りは藁稲積（わらにお。藁を集め円柱状に積み上げ、頂上には藁帽子をかぶせ雨の侵入を防いで屋外で保管する方法）としてストックされ、更に残ったものや古くなった藁製品は畑や田んぼの堆肥となって自然に帰り、全く無駄なく活用をされていた。そして、収穫時に、藁とともにとれる糀殻もまた、保温材、枕の詰物、りんごなどの緩衝材などとして活用された。土から生まれた藁は土に戻り、そして次の稻藁の生命を育む。まさに自然界と人間世界とを有機的に結びつけるエコロジカルなシステムが構成されていたのである。しかし、今や近代化・工業化の波に押されてそのシステムは急速に姿を消してしまった。行き場を失った藁は、不要物として燃やされる厄介者になっている。日本で一年間に生産される藁を全部集めて仮に直径1cmの繩を作ると、地球と月の間を36往復ほどもできるという試算がある。毎年これほど大量入手することができる藁に新しい価値を見出し、それを活用していく方法を探求していくことは、われわれ人類とこの地球にとって吃緊の課題である。現在、稻藁からバイオエタノールを取り出したり、稻藁をペレットにして燃料にしたりしている地域もあるが、コストの面で順調にいっていないようである。

### 3. 「稻垣藁の会」の活動

筆者は、2004年、稻垣町の仲間とともに「稻垣藁の会」を立ち上げた。会の目的は、資源としての稻藁に注目し、伝統文化や伝統工芸としての藁細工技術を継承するとともに、現代の生活にマッチした新しい藁製品を開発することである。会の発起人の一人である長瀬公秀（現つがる市職員）は、千葉大学工学部工業意

匠学科で藁研究の第一人者である宮崎清のもとで藁製品の研究をし、卒業後は稻垣に移住して藁をライフワークにしている。われわれは、稻垣町在住の藁工芸の第一人者である鹿内滝光の協力を得ながら、藁細工技術の習得をしたり新しい藁細工の開発をしたりしながら、藁文化の啓蒙のためさまざまなワークショップも実施してきた。学校教育においては、つがる市立稻垣小学校や瑞穂小学校の総合的な学習の時間における郷土学習の一環として藁細工体験を行った。また、稻垣中学校では、近年注目の糀殻を燻炭とし、水質浄化装置（エコフィッシュ）を使った環境教育を行ってきた。また、成人対象のワークショップとしていろいろな施設において注連飾りや様々な藁製品作りなどを行っている。大学生を対象にした活動は、今回がはじめてである。

### 4. 授業の目的

現在では、いわゆる「100円ショップ」に見られるように、生活用品や装飾品等に至るまで非常に安価に手に入るため、ものを作るという行為は一部の愛好者だけのものになった。こうした現代を生きる学生に、青森の伝統的生活文化である藁細工を教えることになった。

7回の授業は、初回のガイダンスの後、2回目 「ミニかかしづくり」、3回目 「繩ないの練習」、4回目 「虫かごづくり」、5回目 「鍋敷きづくり」とした。こうした、具体的な作業を通じて、学生には、以下のことを、単に知識としてではなく、全身を使った実際のものづくりの体験の中から、感じたり、気づいたりしながら学びとて欲しいと考えた。

- ・稻藁の特徴や素材としての性質
- ・古くから伝えられた「繩ない」や「結び」の技術
- ・伝統的藁細工は、先人の知恵と工夫が内包されていること
- ・伝統的藁細工は、極めて合理的であるとともに美しいこと
- ・藁の素材としての汎用性の高さ
- ・片付けや掃除も含めた計画的な作業をする姿勢を身に着ける
- ・技術を身につける大変さ
- ・作ることの楽しさ

授業最後の6回目と7回目は、自分で考えたオリジ

ナル作品の制作と発表とし、創造性の発揚と鑑賞の場とした。

## 5. 授業に向けて

### ①前準備

本来、藁は稲作文化のなかでおのずとできるものであり、理想的には米の栽培などを通して藁の準備から授業に含めたいところである。本授業で材料とした藁は、いい米とともに、いい藁の収穫を目指して「稻垣藁の会」で収穫したものを使用した。本来なら、田植えや稲刈りも含めて学生に体験させたいと思い、声をかけてみたところ、少数ではあるが田植えに参加した学生がいた。藁を藁細工に使うには、乾燥の後、外側の葉っぱであるシビ（前述）を取り除く必要があるが、シビには土埃が付いているうえに、かさばるので、時間の制約上、シビ取りをした藁を準備した。藁の構造や特性を理解するにはシビも含めて作業するのが理想である。藁の準備に関しては今後の検討課題である。

### ②進行方法

作り方を最初から最後まで事細やかに教えて、参加者が皆同じものを目指して作るか、あるいは基本的な部分だけ教えて、後は参加者が創意工夫して自由に作るか、それぞれ教授法にメリット・デメリットがある。

方法	特徴	自由度
①見本を目指して作る	目標がわかりやすい 一定の満足度 技術伝承、担い手育成	低い
②創意工夫して作る	個性的な作品が生まれる 困惑が生まれるリスク高い 創造性を育む	高い

今回は最初の数時間を①とし、後半を②として進行することにした。

また、指導者による実演、学生による作業、視覚資料、をどのような関係で授業を進めるかによる教授法の違いがある。①実演の後に作業 ②実演しながら作業 ③資料を見ながら作業、と分類でき、それぞれのメリットとデメリットがある。また、参加者の人数や時間的制約によってもその都度変える必要がある。

方法	メリット	デメリット
①実演の後に作業	・全体のイメージが沸く ・自由度がある程度高い	・困惑する人がいるかもしれない
②実演しながら作業	・全員同じペースで進む ・脱落者が少ない ・最も丁寧な方法	・時間がかかる ・全体のイメージがわかりづらい
③資料を見ながら作業	・短時間でできる ・指導者が常時いても補足説明だけでできる ・自由度が高い	・具体的なイメージがわかりづらい ・丁寧な資料が必要 ・困惑する人、脱落者が発生しやすい

今回は受講者が20名という比較的少人数であるため、①の方法で実施することとし、困惑する人が発生した場合は個別に対応した。細かい作業が不得意な人もいるが、制作することが苦痛にならないよう、楽しく作業ができるように配慮した。

## 6. 授業内容

### <1時間目>「ガイダンス」

最初の自己紹介に続けて、藁についてのアンケート、もの作りの素材としての藁の有効性（堅さ・柔らかさ・保温性など）についての簡単な説明をした。

アンケートでは、学生が藁をどれくらい知っているか知るために、次の3つ質問をした。

- ① 稲の丈はどれくらいか？
- ② 藉に対するイメージは？
- ③ 藉の立面図・断面図を書きなさい。

### ①について

長さ	2 m	1.5m	1 m	80cm	60cm	50cm	30cm	20cm
人数	1	2	7	2	1	1	4	2

ほとんどの人が正しい稲の丈を把握していないことがわかる。農村部の出身であれば80cm前後ということが分かるようである。

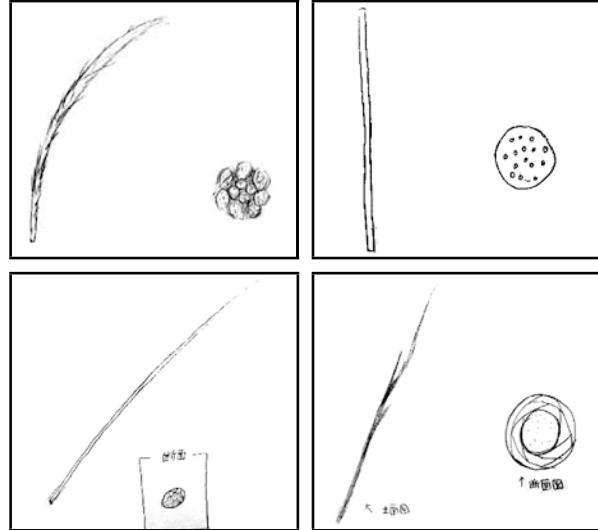
### ②について

- ・昔っぽい
- ・茅葺き屋根
- ・恨めしや
- ・暖かい
- ・燃えやすい
- ・堅い
- ・家畜の餌
- ・和風
- ・藁人形
- ・納豆を包むもの

などであった。古いもの昔のものというイメージが強いようである。

### ③について

断面が正しく中空に書いてある学生は半数ほどだった。



米を主食としていただきながら、その米がどのような植物に、どのような状態で実をつけているのか、分からぬ若者が少なくないようである。

次に、藁を実際にパートに分解して、それぞれの部材の形状や堅さ・柔らかさなどを調べさせた。藁には3~4カ所に節があり、そこから葉が出ていること。茎は中空であり、保温性や弾力性に優れること。米の付いていた部分はミゴといい、細くて堅いこと。乾いている藁はもろいが、水分を含むと柔らかくしなやかになることなど、を実際に触りながら体感してもらった。藁の特性を知ることは、藁で何ができるか何ができるいかを判断できるようになるために重要なことである。

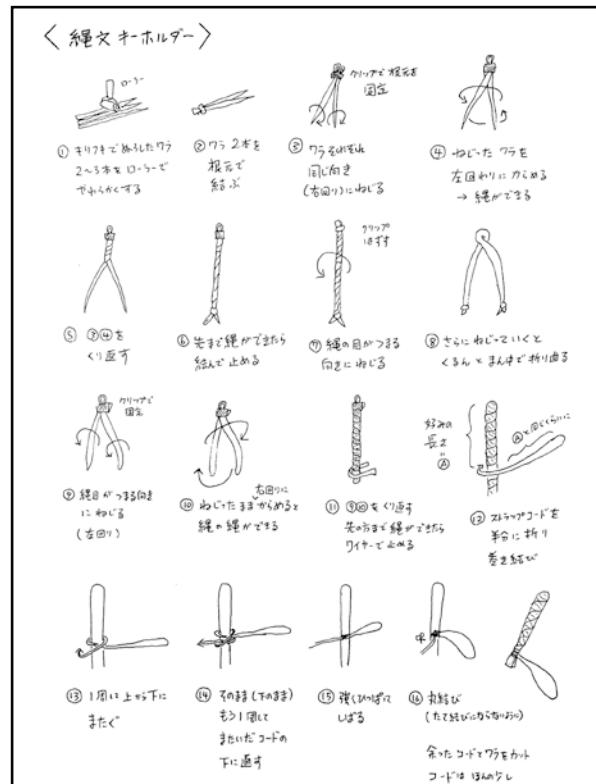
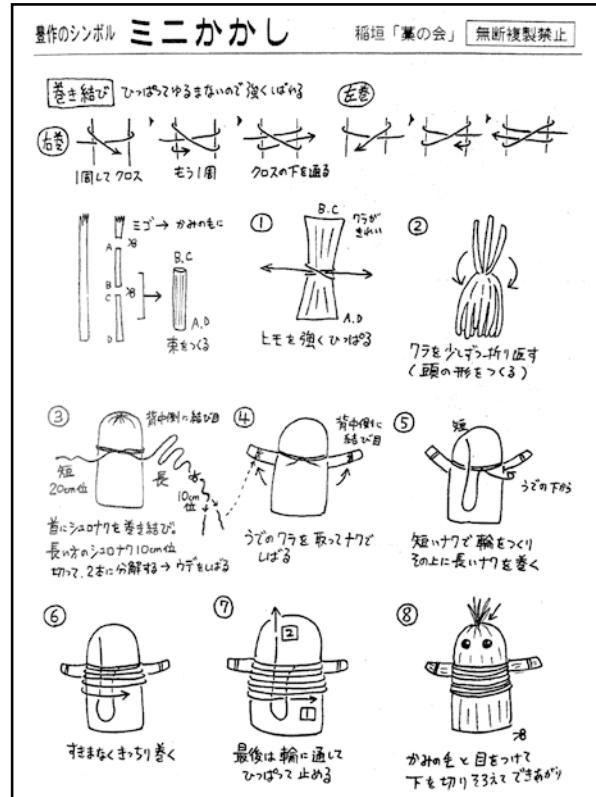
### <2時間目>「ミニかかしづくり」

藁細工には藁を紐で縛るという作業が多い。簡単に緩まない「まき結び」と、結び目が表に出ない「まき締め」の二種類の結び方を習得するために、藁を束ねた「ミニかかし」という人形を制作した。「まき結び」と「まき締め」は、その後いろいろな場面で活躍することになる。「ミニかかし」は完成後、トントン相撲をして遊ぶことができる。大学生も大いに盛り上がった。

### <3時間目>「縄ないの練習」

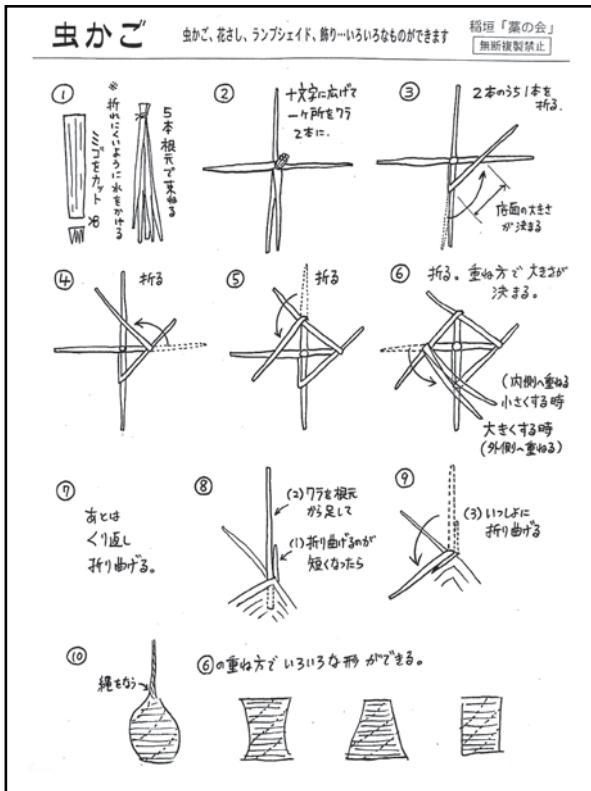
藁細工の基本である「縄ない」を練習した。2本の縄をよりながら絡めていく作業であり、多少難度が高い。

また、縄ないの応用として、縄文土器風の模様を付ける縄を小さく作り、「縄文キーholder」とした。完成後、粘土に擦り付け、縄文模様を付けてみた。ちなみに、縄文時代に稻作は行われていなかったようで、実際は草や樹皮などの纖維を利用して作っていたものと考えられている。



## &lt;4時間目&gt;「虫かごづくり」

昔、螢などの虫を入れる虫かごを稲藁や麦藁で作っていた手法である。簡単な作りでありながら、完成後の幾何学的な美しさは感動的でもある。四角形で作り始めるだけでなく、三角形や五角形などで作っても面白い。また、全体の造形を様々にすらすことができ、広く応用が利く。

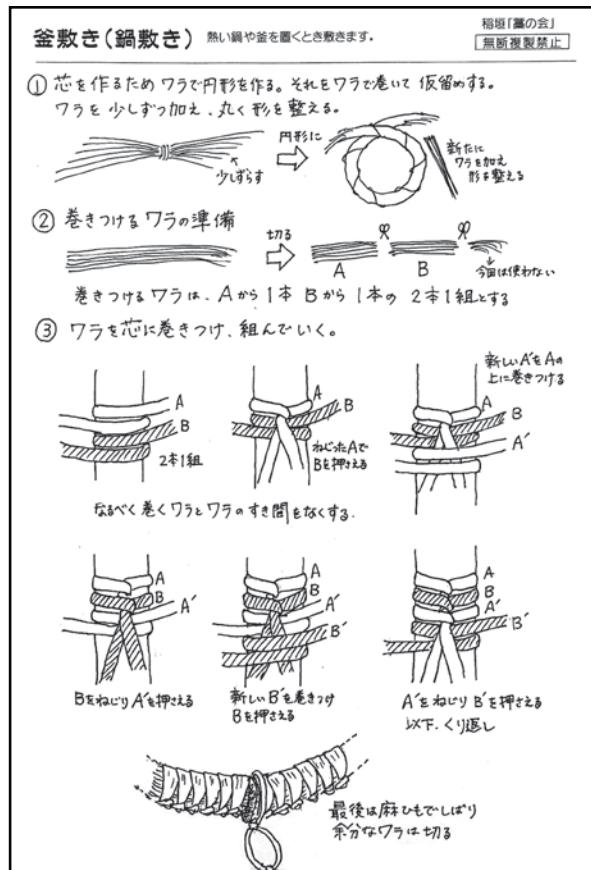


## &lt;5時間目&gt;「鍋敷きづくり」

鍋敷き（金敷き）である。単調な作業の繰り返しだがあるが、その集合は見事な文様になる。断熱性の高さから、底の丸い釜を置くのに使われたが、形の完成度の高さから、リースのように飾りものにすることができる。また、大きさを変えたり、形を変えたりして、いろいろな造形が可能である。

## &lt;6時間目・7時間目&gt;「自由制作」

自由制作。藁の特性をよく考え、そしてそれを使う人のこともよく考え、オリジナルの藁作品を作るよう指示した。ユニークな作品を期待したが、限られた時間ということもあり、今まで作った藁細工の応用だったり、ネットで検索した藁細工だったりということが多かった。



## 7. 学生の感想

最終回の最後に本授業を通しての感想を自由形式で書いてもらった。うち3点を紹介する。

○藁細工を通して昔ながらの技術を学ぶことができるとても良い機会でした。昔の人の知恵や工夫が詰まっている藁細工は魅力的で実用性もあるので、今の時代でもっと使われたら良いと思います。授業で、プリントや言葉で説明された後に実際に手を動かしてみようすると、分かったつもりでいてもきちんと理解していなかつたことが多かったです。どのようにしたらいいかわからないとき、先生が実際に手を動かしながら教えてくれたことで理解することができ、藁をだんだんと使えるようになった。その時、「これが技術か。」と、経験と共に上達する仕組みに触れることができて、ちょっとした感動がありました。藁細工のように手を動かすことで慣れ、上達していく経験は今の時代では少なくなってきたおり、自分で手を動かし、自分で創作する機会も少なくなっているので、自分がこの授業を通して思ったことは、「自分で物を作るっていいな。」ということでした。自分で考え、手を動かす、それは自分にとって夢中になれるることであり、授業時

間も流れていくのがあつという間に感じられた。小学生、中学生の頃に感じたような、わくわくとした気持ちに戻って、創造する楽しさも学びました。このようなものづくりは、自分自身に創作意欲をもたらしてくれる他にも様々な感性や自己成長をもたらしてくれた。これから的人生、今回の経験を積極的に取り入れて成長していきたい。

○以前から“藁”というものの存在は知っていたものの、構造も知らなければ、藁を使った工芸品にも特に関心を向けたことはなかった。それは一般に世間で言われる「伝統工芸や文化の継承者の不足」に通じるように感じる。若い世代が地域の伝統的なものを知らないという状況があることはあまりよいことではない。その点、こうして大学の講義を通してではあるが、藁細工に触れ、藁のことを知ることができてよい経験になった。

また、藁細工は昔の人々の生活の知恵の結晶のようなものだという印象を受けた。藁は米を収穫したときの、いわば残骸的存在である。それにもかかわらず、それをカゴや鍋敷き、装飾品等に作りかえる技術、アイデアは素晴らしいと思う。今日でも、ゴミだと思って普段私たちが捨ててしまっているものはたくさんある。我々はそれらを有効活用できないかを模索していくべきだと感じた。

○藁細工を行ったのはこの講義が初めてである。実家が米農家だったこともあり藁自体にはなじみ深く生きてきたと思っていたがこのように何かを作る素材として扱うことではなく、私にとって藁とはあくまで稲作の副産物であったのだ。実際に体験してみてまず感じたのは昔の人は縄の一本手に入れるのにもこれだけ時間をかけて作っていたのか、という思いであった。自分の不器用さもあるが一つ一つねじっていくのですらきれいにできず、たった数センチ撲るだけでなかなかの時間を要したのを思い出す。またそれより後に作製した藁の人形は、家に飾っておいたところ友人からかわいい、とのコメントをもらえたので気に入っている。最後に取り組んだのは自由創作課題であったが私は正月飾りをテーマに作製した。本来、注連飾りを飾るのは神様が宿るところのはずだが、果たして我が家に飾るのに適した場所があるのかどうかなどはよく考えずに取りかかった。注連飾りらしき画像を探しては見よう見まねで形を作っていましたが半ば強引にくくりつけたところもあれば何を象徴しているのかわからない謎の部分もある。ただ、周知の注連飾りの模造

になってしまった面は少なからずあり、創作と呼ぶにはいささか不適切ではあるものの全てを創作するには時間が足りなかつたのも事実である。故にこのような形になった訳だが、家に実際に飾るとなればその他の縁起を担いだ飾り物でも付けようかと思う。今回はあくまで藁細工としておこないたかったためその他の飾りを付けるのはやめておいた。今回、身近にある物で生活を豊かにする物品を作り上げようとしてきた昔の人々の知恵に触れ、そしてそれを現代にも残る文化として実体験できてよかったです。藁細工の文化がこの先にも長く伝えられていくことを願いつつ、堅い藁を無理に曲げようとして指を刺したのもまたいい思い出となってほしい。

## 8. 考察とまとめ

学生達の感想を読むと、当初の目的としていた、ものを作ることの楽しさ、上達することの喜びを感じてもらえたようである。また、稲作農耕過程において産出される副産物である「藁」を利用するいわゆる「副産物活用文化」ともいべき藁の活用アイデアを素晴らしいと評した学生もいた。「昔の人の知恵や工夫が詰まっている藁細工は魅力的で実用性も劣らないため、今の時代でもより使われていかれたらしい」とか、身近にあるものを広く生活を豊かにするために活用していくこうとする「手作りの文化」に触れ、「藁細工の文化がこの先にも長く伝えられていくことを願う」との言葉に、授業者として大いに力づけられた思いである。ただ、自由制作の藁作品は、事前に作ったものに少し手を加えるとか、ネットで調べた藁細工の模倣など多く、その点は残念であった。十分考えて、失敗しても何度も作り直すことができる時間的余裕がほしいところである。さらに、藁を藁細工としてだけでなく、全く違った発想からの利用方法を考案するということがあっても良いように思う。今回、限られた時間なので、十分伝えられなかつた部分もあったが、さらに、ワークショップの方法や内容を吟味し、授業改善につなげていきたい。

### ＜参考文献＞

- 長瀬公秀「ワークショップはナマモノ」『藁』32, pp. 12-16, 2018
- 宮崎清『ものと人間の文化史・藁（わら）I』法政大学出版局, 1985
- 宮崎清『図説藁の文化』法政大学出版局, 1995



自由参加の田植



授業風景



縄ない



粘土に縄文をつける



トントン相撲



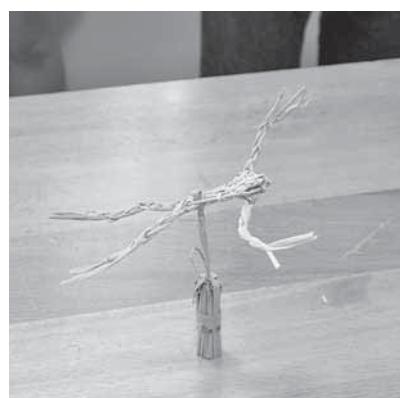
虫かご作り



銅敷き作り



バベルの塔



カエル



受講生と作品